

講演要旨

都市とふるさと

——都市地理学の展開と地域研究のあり方——

鈴木 富志郎*

I. 「ふるさと」とは何か

最近、しばしば「ふるさと」という言葉を見聞きするようになった。これは、東京などへの一点集中を排し、多極型国土分散建設を目標とした第四次全国総合開発計画の中で、当時の竹下内閣がとなえた「ふるさと創生論」をきっかけとし、1988年のふるさと創生資金の交付も「ふるさと見直し論」にもつながるものと思われる。

それにしても、「ふるさと」とはどういう存在、どういう地域なのだろうか。“兎追いしかの山…”ではじまる「故郷」という文部省唱歌（正確には尋常小学唱歌として制定されていた）は、日本人のメンタリティにマッチしたメロディと歌詞をもち、人々にもっともよく知られた歌の一つといわれているが、歌詞の中にでてくる“忘れがたき故郷”（一番）、“志をはたして、いつの日にか帰えらん”（二番）、“山は青き故郷、水は清き故郷”（三番）という言葉は、作詞者・高野辰之¹⁾のふるさと観を如実にあらわしており、同時にこの感情は、少なくとも戦前までの日本人に共通した“笈を背負って上京し、錦を着て

家郷へ帰る”心情であったといえよう。しかし、これらは自然に囲まれた田園地帯にふるさとをもつ人々にはあてはまるものの、都市で生まれて都市で育って来た者にとっては、実感をともなわない言葉となっている。

東京の下町・浅草で生まれた私自身の幼時をふりかえてみても、近所の空き地でトンボやセミを追いかけるぐらいはしたことがあるものの、兎や小鮎は動物園にでも行かなければ見ることもできなかった。それよりも道路上でのメンコ、ビー玉、ベーゴマなどの遊び、あるいは子供たちが集まる駄菓子屋、毎夕やってくる紙芝居屋の拍子木の音の方に郷愁を感じず。都市計画家である Lenz-Romeiß, F. は人生の通過点である都市生活にもふるさとの感覚をとり入れるべきと主張している²⁾が、私が留学中に訪れた場所のうち、もっともふるさととの類似を感じさせられたのはニューヨークであった。つまり大都市で育った者にとっては、いかに自然が少なからうと、他人がどう感じようと、大都市の喧噪の中に自分のふるさととを意識するのであろう。

私は、主として研究・調査などで、北海道から沖縄まで日本全国354ヵ所余りを訪れているが³⁾、これらの旅行を通じて、それまで

* 立命館大学名誉教授・愛知大学教授

知らなかった生活や文化に接する機会を得た。たとえば、1955（昭和30）年ごろ訪れた鹿児島駅前朝市にいた2人の老婆たちは、いかにも楽しそうに談笑していたが、土地の言葉が多く、そのアクセント、会話のスピードとあわせて、なにを云っているのか全く理解できなかったし、そのすこし後に北海道の国鉄・様似駅の構内、当時のローカル線の木造駅舎のうす暗い一角で、顔にイレズミをしたアイヌの老婆に出会った時には、知識としては知っていたものの、一瞬ドキッとしたのも事実である。また、ゼミの学生に教えられた、香川県の一部の山間部にみられるという、餡の入った餅で正月の雑煮をつくるという話も強く印象として残っている。

このように、それぞれの地方・地域によって異なったあらわれ方をする生活や文化に立脚するさまざまな現象は、その事実を知っている人々にとってはふるさとを意識させるアイデンティティであろうし、同時に現地での見聞の積みかさねを重視する地理学の研究にとって——たとえそれが伝統的手法といわれようとも——貴重な知識の財産となっているし、それこそ地理学の原点ともいえる地誌となりうるものなのであろう。

II. 「ふるさと」の特性

われわれが「ふるさと」という言葉をきい

た時に思いおこすのは、行ったこともない戸籍上の本籍地や単にそこで生れたというだけの場所ではなく、少なくとも幼少のころ、あるいはその後何年かはそこに住み、そこで育ち、その人の心と生活に影響を与えた地域を指している。

ところで、見知らぬ土地へ行って、住み慣れたところとのちがいを感ずるのは、目に見える風景、聞こえて来る物音、そして食物の味が主なものであろう。これは下のようにまとめることができよう。周囲をとりまく地形などととともに、一般にランドマーク⁴⁾といわれる構造物が、地域を代表して視覚にうったえるものとされるが、街の様子やそこを走るバスの色などの身近なものにも違いが見いだされる。聴覚、つまり耳にきこえてくる音がちがいを感じさせる最たるものかもしれない。その地方特有のアクセントをもつ言葉、いわゆる方言が代表的にとり上げられるが、単語のちがいも意外と耳につくものである。たとえば、あまりにも有名になってしまった“バカ”と“アホ”は、もちろん語調やいい方によってさまざまなニュアンスはあるものの、関東系の連中にとってはバカといわれてもあまりこたえないのに対し、関西の人々には大変に強くひびくらしいし、アホは全く正反対に印象づけられる。私自身が未だに慣れない——異和感をいだいているのは〇と×で、マルバツといい慣らしてきたものが、マルペケ

[視 覚]	風 景	見慣れた身の回りの地域
[聴 覚]	言 葉 (方言)	その街・土地のもつ音
[味 覚]	固 有 の 食 物	“オフクロ”の味
	地域性 (風土)	
心理的に		心象的な「ふるさと」

といわれると一瞬身がまえてしまうし、マルバツあるいはマルベケといういい方(使い方)ができる人は出身地に地域差があるようであり、“三つになるまで育った土地の言葉は一生抜けない”と聞いたおぼえがある。

味覚にいたっては、ここで改めて述べるまでもないであろう。各地に郷土料理と称する独特な調理法や味つけがあり、さらにいわゆる“ハレ”の日の行事にともなう料理にローカルな風習が強く残されている。

しかし、これらは地域性風土性をあらわすものではあっても、真の意味のふるさと感といえるのであろうか。「ふるさと」には一般的ないわば最大公約数的なものと同別のものがあるのではないかと考えられる。そうすると前ページにまとめた項目で、右側に記したものの、いわゆる近所の様子⁵⁾と友人たち(視覚)、耳になじんだもの売りの声⁶⁾やカエルの声(聴覚)、そして何よりも他家とは微妙にちがう“オフクロの味”(味覚)が、なつかしい「ふるさと」となるのではないだろうか。しかもこれらの感覚に加えて、心の問題、つまり“遠くにありて思うもの”のような心象的な「ふるさと」が大きなウエイトを占めていると思われる。そうすると、「ふるさと」は何も自然にめぐまれた地域だけの問題ではなく、都市にも十分ありうるといえよう。

Ⅲ. 都市生活の特性

“都市の魅力(都市で生活する魅力)”とは、かねてから私が指摘していることであり、そこには都市で生活することによって得られるプラスの要素、つまり経済活動の優位さ、生活上の便宜さ快適さ、文化活動に接触でき

る可能性の多さなどと、マイナスの要素、すなわち環境としての自然の少なさ、伝統ないしは土着性の希薄さ、共同体としての意識の低さなどがあげられるが、これらは都市地域(urban region)と農村地域(rural region)とでは、それぞれ反対に作用する要素と考えられる。

都市地域にとってプラスとなる要素は、まさに“みやこ”と“いち”、つまり中心性を機能とする都市での生活にかかわるものであり、生活面での便宜さや広い意味での文化との日常的なふれあいが都市生活のメリットといえよう。反対にマイナスとなる要素は、これらこそが前節までに述べてきた「ふるさと」に直結する要素といえるものなのかもしれない。しかし、伝統性や共同体は、少ないとはいえず、都市地域にも存在するのであって、たとえば京都の祇園祭や東京の三社祭などと、それを支える町の人々の存在で実証されているといえよう。

土着性をあらわす一つの指標として、国勢調査報告⁶⁾から“自市区町村生れ”の人口率を調べてみると(第1表)、1950(昭和25)年には全国市部の合計では56.8%であり、東京区部はこれとほぼ等しい57.0%、京都市はやや高い62.3%であった。ところが1980(昭和55)年になると“出生時から”の居住者は、全国都市部合計が20.0%、東京区部15.4%、京都市19.8%に激減した。この両調査を通じて東京区部が京都市より5%ほど低いという構造は前回と変わらず、人口絶対数の多さをも考えると東京区部の流動性の激しさが理解されよう。いずれにせよ、この30年間にそれぞれ1/3程度に率の低下をみたのは、この30年間の急速な工業化の進展と、それに伴う都市

化、そして人口移動がいかに大きかったかを物語るものであろう。それにしても、全国市部より高い“自市生れ”率をもっていた京都市が1980年には全国市部と同じレベルにまで変化してきた点は注目に値する。

また、相対的比率は低下したとはいえ、東京区部には128万もの自区生れの居住者、つまり都市をふるさととする人々が存在していることを見落とすわけにはいかない。

わが国の中で、みやこ性のある都市といえは東京と京都ということになるだろうが、この両市はしばしば相異なった住民気質をもっているといわれてきた。ズケズケした口調でものをいうが、本心はサッパリした淡泊な気性、照れくさを洒落をいってごまかし、イキで俠気を好む態度などが巷間よく知られた東京人の気性であり、京都人のそれはおだやかでやわらかな口調の中にふくまれる芯の強さ、それを知る人にもみアイデンティティとして伝わる独特ないまわし、伝統と合理的な人間関係を守ろうとする気風、ということになるだろう。これらは、いずれも長い歴史を通じて培われて来たものであるが、外来者に対する受け入れ方や対応の仕方も関係して来ていると思われる。それは江戸—東京が、幕府そして新政府と、政治・行政中心の直轄下であり、つねにそれらの仕事に従事するために

新しく来住した人々を受け入れざるを得ない立場にあったのに対し、京都は行政権力とははなれた位置にあって、外来者も、いわば一時的滞在者としてむかえいれて居たというちがいがあったと考えられる。たとえば、都市内部の地名をとり上げてみても⁷⁾、東京は合理化に名を借りての改変、むしろ由緒ある地名が消えてしまったという改悪をくり返し強制されて来たのに、京都では昔からの町名がそのまま残されており、同一町名をもつ町が市内に何ヵ所もあったり、一つの町が極端にせまかったりするなど、ある意味では混乱を生ずるほどに伝統性ないしは特殊性を保持しつつづけている。

“3代つづけば江戸っ子”、“3代たたねば京都人ではない”という二つのことわざが東京と京都の能動性と受動性をあらわしているとも考えられる。しかし、戦前の東京の下町での生活を知っている者にとっては、近所づきあい、町内や家の清掃、助け合いなどのあり方をみていると、東京も京都も古くからの庶民の生活には大差がなく、この辺に都市生活の原点（一般性）があるのではないかと思われる。

第1表 “自市生まれ”人口の変化

		全国市部	京都市	東京区部
1950 (昭和25) 年	総 数	31,203,191	1,101,854	5,385,071
	自市生まれ (%)	17,735,266 (56.8)	685,940 (62.3)	3,069,383 (57.0)
1980 (昭和55) 年	総 数	89,117,762	1,472,921	8,336,303
	出生時から (%)	17,819,247 (20.0)	291,069 (19.8)	1,284,513 (15.4)

Ⅳ. 都市地域研究の発達

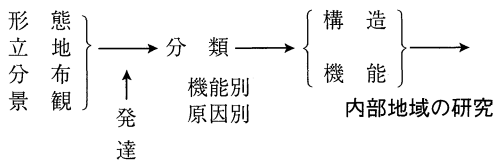
都市地域の地理学研究、いわゆる都市地理学の研究対象はきわめて多方面におよんでいる。しかも、他分野の地理学は、農業、工業、気候などのように、特定項目の地域的展開を研究してゆくのに対して、都市地理学はまず都市という特定地域があり、そこに発生するさまざまな問題を扱うだけに、時代とともに研究の方向、関心も変化してきている。

近年の研究動向の変化は、大きく次の4点にまとめることができよう。点としての都市から面的なひろがりをもつ都市を対象とすること、静態研究から動態研究への変化、形態論から機能論への関心の動き、そして市域を越えた広域的な視点の導入である。これらは、かつての都市域が実質地域として内部的に均一な、ないしはバランスのとれた地域、つまり個体（点）として扱うことができたのが、周辺町村との合併や人口増加による都市化の影響で、しだいに外方にひろがるようになり、都市（都市地域）を面としてとらえざるを得なくなったことが最大の要因といえる。その

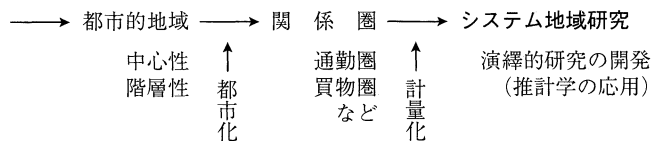
結果、都市を個体としてあつかう立地や分類はおこない難くなり、内部構造や機能の分析に関心があつまり、さらに都市圏的な思考が高まっていった。これらの研究の進展を模式的に示すと第1図のようになろう。

また、20世紀初頭まで、研究されることの多かった個々の都市の問題を明らかにする都市誌（モノグラフィー）は、次第に地域ならびに地域論の展開による都市あるいは都市圏研究に変わり、やがていわゆる計量革命を経て演繹的研究手法の開発にすすんでいった。ただ、都市はさまざまな現象が存在する地域であるから、研究・分析にあたっての視点も、社会学、都市工学、建築・土木、行財政など多くの分野からのアプローチがある。それにしても、家屋密度、土地利用あるいは高層化などの直接的に目に見える景観的な立場と、中心性経済性のような機能論的立場の両面を考えてみる必要があろう。それらと同時に、地理学の研究であっても今後はそこに住む人間そのものとその活動をとらえる、社会学あるいは心理学的方法をも加味した研究も重要になってくると考えられる。

個体としての都市の研究



圏としての都市の研究



第1図 都市地理学の研究動向の変化

V. 地域の個性と一般性—まともに代えて

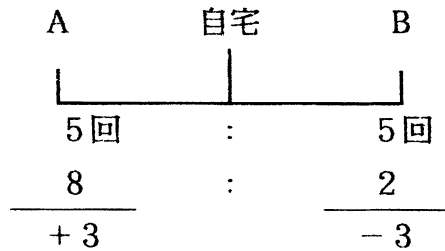
地誌が地理学の原点であり、出発点であることは言をまたないが、これまでの地理学は地誌、つまり個別の地域での、個別の事象の積み重ねという帰納論的方法をとって来ている。そして、それにあてはまらない部分は例外あるいは特殊な問題として処理してきた。Shaefer, F.K. が“地理学の例外主義 (exceptionalism)”と指摘した⁸⁾のは、まさにこの点にあり、それが演繹的方法による地域問題の解明を試みる、いわゆる New Geography 勃興のきっかけとなった。つまり、それまでの因果律的決定論に代わる統計的決定論の導入である。

さまざまな考え方をもつ人間集団がひきおこす社会生活は、数字では割り切れるとはいえないものの、ばくぜんとしたものであっても何らかの共通した物さしがあり、それとの差が個別の問題となるのではないかと考えている。

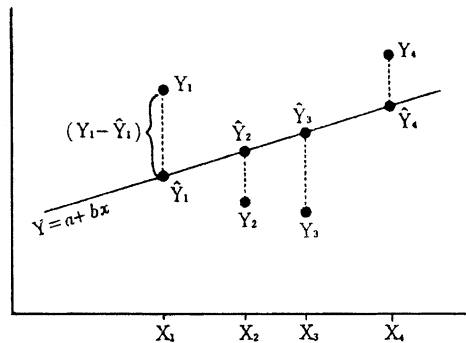
20数年も前から、私は《タバコヤ理論》と名付けた、単純だが基本的な考え方をもっている。タバコは、同一銘柄かつ同一品質の商品が、日本国内のどこでも同一価格で販売されているから、どこのタバコヤで購入しても何らちがいが無い筈である。それでは第2図で示したように、自宅から等距離の位置にあるA・B2つのタバコヤの、どちらの店へ買いにゆくのであろうか。理論的にはA・Bの両者の間には差がないのであるから、5:5の確率で買いにゆく筈であるが、それが8:2となるのであれば、現実の購買行動と理論的購買行動とのちがいは何らかの誘

因因子——たとえばバス停の近くであるとか、雰囲気の良い店であるとか、が作用していると考えられ、その因子が個性をつくりだすものであり、その分析が重要となる。また、人口や生産量の増加傾向の年度別変化のグラフなどは、 $Y=a+bx$ の一次回帰直線にまとめられることが多いが、これは最大公約数であって、回帰直線は一般性の傾向をあらわしているにすぎず、現実の値と回帰直線の間には、第3図の $Y_1 - \hat{Y}_1$ のような残差とよばれる差が生ずる。この差が地域の個性をあらわすから、この残差の分析が重要になってくる。

地理学は、地域性を追求することを本質としている。そうなれば何をもって地域を図るのか、その基準は何かが問題となろう。地理学の研究にあたっては、古くから比較という



第2図 《タバコヤ理論》



第3図 回帰直線と残差

ことが求められて来ていた。これはまさに一般性の中に個別性を見いだすと言うことなのであろう。各地を観察して歩け、そしてその地域的違いを明らかにせよ、とは先学の方々から言い伝えられて来たことである。演繹的方法による統計処理も重要だが、その一方で各地の実態にふれること、つまり個別性をみわける目を養うことも必要なことと思われる。

本稿は「都市とふるさと」というテーマの下で、これまで、農村側から論ぜられることが多かった「ふるさと」を、都市の側から考えてみようとして試してみた。「ふるさと」も都市で生活して来たものと、自然に囲まれた地域で育ってきたものとは、その受け止め方が異なる——異なるとは当然なのではないだろうか。なにしろ、いわゆる“団地生まれの2世”が活躍する時代であるから、個別の「ふるさと」のとらえ方も自ずと変わって来ざるを得ないと思われるからである。

〔付言〕本稿は、筆者の定年退職にあたって、1997年12月22日、立命館大学以学館2号教室でおこなわれた最終講義をもとに文章化したものである。ただ、最終講義が「地誌（日本）Ⅱ」の所定の時間を利用して行われたために、通常の学生が出席することとのかね合いから、講義の主旨が中途半端におわってしまったと思われる。そこで、本稿ではこれまでの筆者の研究をとり入れて、都市地理学の研究発達動向を書き足すなどして、多少は文章としても読めるように書き改めたことを付言しておく。

注

- 1) 明治9年、長野県下水内郡豊田村に生まれた国文学者で演劇研究者。「春が来た」、「紅葉」、「春の小川」などの抒情唱歌の作詞が多い。
- 2) Lenz-Romeiß, F. (1957): Die Stadt—Heimat Oder Durchgang station? (Verlag Georg D. W. Callwey)
- 3) 訪れた場所をプロットした地図は省略するが、宿泊した場所141ヵ所、日帰りで訪れた場所90ヵ所、他に東京・大阪・名古屋都市圏内で123ヵ所である。これらの大部分は個人の研究・調査、職務上の出張、学生の引率などで訪れた場所であり、家族旅行で訪れた場所は10数ヵ所にすぎない。なお、くり返し訪れた場所であっても1回に数えてある。
- 4) 本来は、その都市または地域であることが一目で認識できるような独特な構築物を、ランドマークという。
- 5) 拙稿（1995）：“市井こそわが故郷”立命館学園広報UNITAS, No. 270に詳述してある。
- 6) 近年の国勢調査報告で、この種の統計が公表されているのは1950（昭和25）年と1980（昭和55）年の両年度のみであり、調査項目も1950年は“出生地”、1980年のそれは“前住地”となっている。したがって、両年度の調査内容にはちがいがあり、直接の比較がおこなえない点には注意しなければならない。つまり、1980年の統計では、現住の自区で生まれても、しばらく他の地区で生活していたのであれば、“出生時から”の居住とはならない点などである。
- 7) 拙稿（1990）：“都市地域の地名に関する事例的考察—その改変・新設・保存をめぐる”立命館地理学第2号、83～94頁
- 8) Shaefer, F. K. (1953): Exceptionalism in Geography A. A. A. G., 43-3
 この中で筆者は個性記述的な本質論を批判し、“地理学には例外（とする地域）が多すぎる”と述べている。